

ピア・サポートによって拓かれる大学教育の 新たな可能性

山田 剛史

(島根大学教育開発センター副センター長・准教授)

1. 大学を取り巻く環境の変化と学生支援の位置づけ

現在の大学を取り巻く環境の変化について、川島(二〇一〇b)は「大学教育のユニバーサル化」「慢性的なキャリア不安」「大学教育のアウトカム重視への転換」「システマ的な大学教育の基本ファクターとしての学生という視点」の四つにまとめている。平成二二年度の学校基本調査(速報)を見ると、大学・短大への進学率は五六・八%で過去最高値を記録し、多様な学修履歴を有する学生が大学の門をくぐる一方で、学部卒業者の就職率は六〇・八%、

一時的な仕事に就いた者三・六%、進学も就職もしていない者一六・一%と、学生を待ち受ける社会情勢はより厳しいものとなっている。日本の大学教育の質保証の一端を担ってきた入試制度は「選抜から相互選択」へと移り、出口管理の強化へと質保証システムを再構築する必要性が生じてきている。学生の学力低下の問題が焦眉の課題となり、補完教育や初年次教育など高大の適応的推移を図るような取組が積極展開されることとなった。一方で、学生には大學生活を通じてアイデンティティを確立するといった青年期固有の心理社会的な発達課題も存在する。日本学生支援

機構が実施している実態調査（平成二〇年度）では、学生相談件数は平成一七年度時に比べて六四・五%が増加していると回答しており、その内容は「対人関係」が七九・三%と圧倒的に高く、次いで「精神障害」（五四・五%）や「心理・性格」（四二・八%）のメンタルヘルスに関する事項となっている（日本学生支援機構、二〇〇九）。こうした問題は、学業とは関係ない学生個人の問題、あるいは少数派として一部の専門機関の扱う問題とされてきたところがあるが、実際は対人関係の問題が学業の遂行を阻むなど相互に干渉しあっており、学生生活全体をシステムとして捉える必要がある。

文部科学省においても、「大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学づくりを目指して（報告）」（文部科学省高等教育局、二〇〇〇）や「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（中央教育審議会、二〇〇八）、「中長期的な大学教育の在り方に関する第二次報告」（中央教育審議会大学分科会、二〇〇九）などにおいて、学生相談を大学教育の一環（それぞれ人間形成、学習成果、質保証システムといった観点）として捉え直すことの重要性が指摘され、平成一九年度より学生支援機能の強化を図ることを目的とした財政支援（学生支援 GP 等）

も行われてきている。

そのような状況下で、最近の注目すべき傾向として、ピア・サポートなど、学生自身を、学生支援の取組や正課教育・正課外の諸活動、さらには大学教育の運営に参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度を、その相互関係の中で高めていこうとする試みが広がっている（川島、二〇一〇a）。また、日本学生支援機構（二〇〇七）は、学生支援機能を三層に分け、「日常的学生支援（第一層）」における、友人、教員、事務系職員、何でも相談窓口（員）やピア・サポートなどが「制度化された学生支援（第二層）」や「専門的學生支援（第三層）」への橋渡しの機能を果たすことなどが大学に求められる学生支援機能であると、ピア・サポートの果たす重要性について指摘している。

2. ピア・サポートとソーシャル・サポート

（1）ピア・サポートの発展経緯と拡大背景

ピア・サポートの原型は、アメリカにおける一九〇九年ニューヨークで非行防止を目的として制度化された BBS (Big Brother-Big Sister) プログラムに見ることが出来、第二次大戦後の日本の少年非行防止においても導入

されてきた（大石・木戸・林・稲永、二〇〇七）。その後、一九九五～一九九六年にかけて起きた、いじめの第二波と呼ばれる時期から積極的に取り上げられるようになり（池島、二〇一〇）、福祉、保健、医療、教育など多様な領域で様々な活動が展開されてきている。大学教育における歴史はまだ浅いものの、一九九七年に広島大学で開始されたピア・サポート・ルーム（内野、二〇〇三）を契機として急速に広がってきている。二〇〇八年一〇月に行われた日本学生支援機構の調査（二〇〇九）によると「ピア・サポート等、学生同士で支援する制度の実施状況」は、大学全体で二一・三％（国立四五・一％、公立一七・一％、私立一八・二％）、短大八・三％、高専二三・〇％）で、絶対数としてはまだ約五分の一の機関ということになるが、前回調査（二〇〇五年）の一・二・九％から見ればその広がりの早さを伺うことが出来る。

こうした広がり背景にある学生心性として、大学生は同世代との親密性が発達課題となり、友人からのサポートが他の資源と比べて最も高い時期であること（嶋、一九九二）や、大学生の援助要請の特徴として、専門家よりも友人や家族などの身近な援助者に対する援助要請を好む傾向があるということ（木村、二〇〇七）などが挙げら

れる。その上で、杉村他（二〇〇六）は、大学でピア・サポート活動が必要になった背景として、（一）学生の心理的問題の多様化に対して、専門家による相談窓口だけではなく、より軽微な問題の段階で気軽に相談できる窓口を開設して、早期に解決する必要が生じたこと、（二）近年の大学改革に伴ってかえって複雑化・専門化する種々の相談窓口に、学生を適切につなぐため、（三）サークル活動やクラスのまとまりが低下する傾向がある中で、これまで自発的に行われていた学生の潜在的な能力の開発を、相談活動を通じた学生同士の交流によって意図的に促す必要が生じたこと、を挙げている。

（2）ソーシャル・サポート研究から捉えるピア・サポート

ピア・サポートの定義について、¹援助のための訓練を受けた同年代の仲間が、問題に直面した仲間を支援する活動（Cole、一九九九・森川、二〇〇一）や²教師の指導・助言のもとに、子どもたちの相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動（日本ピア・サポート学会、二〇〇八）

などがある。また、日本学生支援機構（二〇〇九）では、大学教育文脈で、学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」と定義づけている。

ここでは、ピア・サポートの効果・意義を捉えるために、上位概念にもあたるソーシャル・サポートに着目する。ソーシャル・サポートの定義について、例えば、既存の人間関係による持続的・互恵的な向社会的行動であり、個人の私的関係だけではなく、公的な関係によるものも含まれる」といったものがある（松井・浦、一九九八）。分類については、受容や共感などの「情緒的サポート」、フィードバックや社会的比較などの「評価的サポート」、助言や情報提供などの「情報的サポート」、労働力や金銭などによる具体的援助などの「道具的サポート」の四分類（Hogge、一九八一）、あるいは大きく「情緒的サポート」（個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促す）と「道具的サポート」（個人が抱えている問題そのものを直接ないし間接的に解決することに役立つ）の二つに大別できると考えられている（浦、一九九二・福岡、二〇〇九）。

ソーシャル・サポート研究では、これまでに孤独感の低

減や主観的幸福感の向上（山口・和田、一九九七・森田、二〇〇三）、精神的健康の維持・向上（塩澤、二〇〇八）、新入生の大学適応とのポジティブな関連（和田、一九九二）、友人のサポートが新入生の自己充実的な達成動機を維持・向上させ、学業および大学生生活全般についての意欲低下を防ぐ効果（福岡、二〇〇〇・福岡、二〇〇七）など、多くの実証的研究によってその効果が示されている。こうした知見は今後一層の進展を見せるであろう。ピア・サポート実践を支えるものとして有効な枠組を提供してくれる。上記類型において、道具的なサポートに加えて、情緒的なサポートが双対を成すものとして挙げられ、それは教員や職員、家族とは異なる友人（ピア）が最も強い影響力を発揮するサポート形態である。こうしたソーシャル・サポートの連鎖が、対面環境のみならず近年進展するオンライン上でも具現化されることで「ソーシャル・サポート・ネットワーク」を形成する。そして、そうした場やそこでの営みは「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」として相互循環的・持続発展的なサポートシステムとなりうる。

ピア・サポートの上位概念となるソーシャル・サポート研究の成果から、ピア・サポートが教職員等の大人による

支援とは異なる側面（学業面・心理面）において重要な役割・機能を果たしている可能性を読み取ることが出来た。次に、大学におけるピア・サポートに関する実践をもとに、その教育的効果および可能性について検討を行う。

3. 大学におけるピア・サポート活動の教育的効果

(1) 実態調査から見るピア・サポート活動の教育的効果

まず、全体を俯瞰し実証的なレベルでピア・サポートの効果を検討するための調査データを取り上げる。ここでは、ベネッセ教育研究開発センターが全国の大学生四、〇七〇名を対象に実施した「大学生の学習・生活実態調査」(二〇〇八年一〇月)を取り上げる(Beress, 教育研究開発センター、二〇〇九)。その中からピア・サポートに関連した学習経験の多寡に関する項目を選出し、学業成績(回答者によって報告された(GPA)や学習成果(LC)の差異について検討を行う。具体的には、表1に示す項目に関して、大学の授業で経験してきた頻度(四件法)を独立変数、学習成果二八項目に関する四因子(F1. 全般的技能・一八項目、F2. 数的処理・五項目、F3. 外国語・三項目、F4. 積極的態度・二項目/四件法)(山田、二〇〇九)を従属変数とした一要因分散分析を行ったとこ

ろ、全ての項目で〇・一%水準の有意差がみられた。多重比較(LSD法)の結果より、経験頻度が高くなるほど、GPAやLCも高くなっているということが顕著に示された。ここにはピア・サポート的な要素に加え、協調学習等のアクティブ・ラーニング的な要素も含まれていることが推察されるため、純粋なピア・サポートの効果と読むことは出来ないが、間接的にでもその重要性を指摘するに足る結果であると考える。その一方で、問題はその学習経験の相対的な少なさを見て取れる。「よくあった」

表 1. ピア・サポートに関連した授業内外の学習経験の多寡による学業成績および学習成果の差異 (N =4070)

35-8. 上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業					
	4. よくあった (136名/3.3%)	3. ある程度あった (666名/16.4%)	2. あまりなかった (1160名/28.5%)	1. ほとんどなかった (2108名/51.8%)	多重比較 (LSD法)
GPA	3.16	3.01	2.94	2.92	4 > 3 > 2, 1
L01 全般的技能	58.37	51.76	49.51	46.65	4 > 3 > 2 > 1
L02 数的処理	15.30	13.85	13.20	12.28	4 > 3 > 2 > 1
L03 外国語	8.65	7.74	7.08	6.32	4 > 3 > 2 > 1
L04 積極的態度	5.12	4.73	4.26	3.58	4 > 3 > 2 > 1

と「ある程度あった」を併せても二割程度である。ピアを含む様々なコミュニケーションを組み込んだ授業が、学生の汎用的技能のみならず知識獲得においても一定ポジティブな影響を与えていることを鑑みると、今後よりこうした要素を含み込んだ授業内外での活動が必要と思われる。

(2) 実践研究から見るピア・サポート活動の教育的効果

統計調査でも示されたように、全国の大学でピア・サポートに関する取組が急増してきている。取組内容としては、新入生の適応支援、補完教育や初年次教育などでの学習支援（メンター）、オープンキャンパスやキャリアガイダンス等のイベント企画・運営、学修・進路・心理面・生活面など様々な問題に応答する「何でも相談室」における支援など様々なものが挙げられる。実施形態としては、大石等（二〇〇七）が指摘するように、一、全学の活動としてピアサポートがあり、ピアサポーターの養成を進めている例、二、すでにある組織（サークル活動やTA制度等）を生かして学生のピアサポーター養成を行い、活動を行う例、三、希望者を募り、ピアサポーター養成を行い、特にピアサポートチームはつくらず、自主的な活動に任す例などが挙げられる。これらのピア・サポート活動はまだ萌芽期に

あり、効果検証といったレベルで成果が示されているものは少ない。そこで、以下では三つの実践研究事例を取り上げ、ピア・サポート活動の教育的効果について検討を行う。

一つ目は、立命館大学が展開する「オリター・エンター活動（オリター活動）」に関する実践研究である（寺本・伊藤・伊藤・中村、二〇〇七）。新入生の大学生活への適応をサポートすることを目的として、一九九二年度から大学の施策の一環として制度化されている活動である。上級生の集団で構成されるオリターが、就任前・就任中・就任後それぞれの段階で六つの項目（積極性、社会性、責任感、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、問題解決力）についてどの程度向上したのかについて五段階で回答している。結果、全体では、就任前三・一八、就任中四・〇九、就任後四・一六と漸次上昇し、就任前と就任後の数値の変化については、数値アップ四九九人（八八・五％）、数値ダウン三七人（六・六％）、変化なし二六人（四・六％）と九割近い学生が上昇していることが示されている。こうした結果を受け、オリター活動は、オリター（個人）、オリター団（集団）を基点に、新入生を動機づけするだけでなく、オリター自身が成長している」と指摘している。多くのピア・サポート研究で指摘されているところであるが、

サポートを行う側の成長という視点は、通常の教職員による学生支援とは大きく異なる。

二つ目は、ピア・サポート的な要素を含むが枠組としては大学運営への学生参画として位置づけられる名古屋大学物理学教室における実践研究である（安田・近田、二〇〇九）。二〇〇三年四月に創設された学生教育委員会は、自発的に物理学教室の学部生・院生の学力向上を目的とした企画を提案・運営している。教育委員会への参加や授業評価アンケートの実施・分析も行っている。こうした活動に参加している学生への面接調査から、経験年数に応じた成長過程（第一段階：「物事を幅広く考える視野を身につける」、第二段階：「企画立案・実行能力を身につける」、第三段階：「主体的に行動する意識を身につける」）を導き出している。第三段階の意識を身につけるには三年以上の経験を積む必要があると指摘している。

三つ目は、島根大学教育開発センターが総合理工学部と協働で、状況論的学習論における認知的徒弟制を基盤として開発・実施したメンター制度に関する実践研究である（森・雨森・酒井、二〇一〇）。対象領域は物理分野で、二〇〇九年度入学生六四名を対象に、新たに設けた学習室（週三回九〇分）に三名のメンターを配置した。メンター

はブレースメントテストなどの結果を踏まえて訪れる新入生（メンティ）の学習をサポートすること、宿題の問題作成や採点を行うこと（後期より）などの役割を担った。結果として、特にメンターによる作問・採点は知識（試験成績）の向上に大きな影響を与えていることが示された。メンターへの調査から、メンター自身も自分たちがつまずいた経験を踏まえ、考え方が分かるようにスモールステップで課題作成を心がけた²⁾といったピアならではの視点の有効性が見出された。上記二事例のような汎用的技能の獲得のみならず、知識の獲得においても教員とは異なるピア・サポートならではの効果が得られたと言えよう。

4. おわりに：ピア・サポート活動の推進に伴う課題

最後に、ピア・サポート活動の推進に伴う問題点と課題について簡単に触れておきたい。Walker & Avis（一九九九）は、Peer educationの失敗要因として次の七つ（①計画の明確なねらい・目標の欠如、②計画デザインと計画を制限する外的環境との不一致、③人的・金銭的投資の不足、④Peer educationは、複雑な過程であり、高度なスキルを身に付けた人材が必要だという認識の欠如、⑤educatorへの適切でないトレーニングとサポート、⑥

境界を明確にしておくことの欠如、⑦多方向からの援助の不足)を挙げている。いずれも重要な要因であるが、とりわけサポーターへの研修・トレーニングは重要であると思われる。池島(二〇〇七)はピア・サポート活動の三段階として、「事前の)ピア・サポート・トレーニング」、「(実際の)ピア・サポート活動」、「(活動後の)スーパージョン」を挙げ、事前のトレーニングが最も重要な位置を占めると指摘している。米国においてもピアリーダーの養成が盛んに行われ、一年次支援プログラムの一環としてプログラムが組み込まれている(山田、二〇〇五)。

また、ピア・サポートが有効に機能するためには、人的・物的環境のハード・ソフト両面での整備が不可欠である。そのためにも、サポーターが主体性を発揮するために、大学院生を中心としたアドバイザーを組み込んだピア・サポート組織(杉村他、二〇〇六)や、サークル活動や授業とは異なる、教職員による教育・指導(佐藤、二〇〇五)、大学内での管理職をはじめとする全学でのしつかりとした支えと、ピアサポーター養成やサポートチームの運営に携わるスタッフの存在(大石他、二〇〇七)など、包括的なビジョンと教職員協働体制の元で位置づけていくことが求められる。

さらに、ピア・サポート活動が広い意味での学生の学びの質向上に結びつくために、関連する研究領域も参考にしながら実践に基づく研究を蓄積していくことも重要な課題であると思われる。

引用文献

- Benese 教育研究開発センター編(二〇〇九)『大学生の学習・生活実態調査報告書』研究所報、五一
- 中央教育審議会(二〇〇八)『学士課程教育の構築に向けて(答申)』中央教育審議会大学分科会(二〇〇九)『中長期的な大学教育の在り方に関する第二次報告』
- Cole, T. (一九九九) *Kids Helping Kids*. Canada: Peer Resources (バーンズ亀山静子・矢部文訳 二〇〇二) 『ピア・サポート実践マニュアル』川島書店
- 福岡欣治(二〇〇九)『ソーシャル・サポート』日本社会心理学会編『社会心理学事典』丸善(pp. 一四四-一四五)
- 福岡欣治(二〇〇七)『大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応—自己充實的達成動機の媒介的影響—』静岡文化芸術大学研究紀要、八、六九-七七。
- 福岡欣治(二〇〇〇)『大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向—達成動機を媒介要因とした検討—』静岡県立大学短期大学部研究紀要、一四(三)、一-一〇。
- House, J. S. (一九八一) *Work stress and social support*. Addison-Wesley Educational Publishers Inc.

- 池島徳大(二〇一〇) 集団の共同性意識の再構築とピア・サポート
 ト 奈良教育大学教職大学院研究紀要、二、三二―四二。
 池島徳大(二〇〇七) ピア・サポート 佐藤修策監修『学校カウ
 ンセリングの理論と実践』ナカニシヤ出版 (pp. 一〇二―
 一〇八)
 川島啓二(二〇一〇a) 大学教育の革新とEDUの新展開 国立教
 育政策研究所紀要、一三九、九―二〇。
 川島啓二(二〇一〇b) 学生支援の現状と課題―学生を支援・活
 性化する取り組みの充実に向けて― 日本学生支援機構学生生
 活部『学生支援の現状と課題―学生を支援・活性化する取り組
 みの充実に向けて―』大学等における学生支援取組状況調査研
 究プロジェクトチーム中間報告書 (pp. 一〇九―一八)
 木村真人(二〇〇七) わが国の学生相談に対する援助要請研究の
 動向と課題 東京成徳大学人文学部研究紀要、一四、三五―
 五〇。
 松井豊・浦光博(一九九八) 援助とソーシャル・サポートの研究
 概略 松井豊・浦光博編著『人を支える心の科学』誠信書房 (pp.
 一―七)
 文部科学省高等教育局(二〇〇〇) 大学における学生生活の充実
 方策について―学生の立場に立った大学づくりを目指して―
 (報告)
 森川澄男(二〇〇一) ピアサポート活動の実際―教師との連携を
 どうすすめるか― 臨床心理学、一(二)、一六〇―一六五。
 森田薫(二〇〇三) 青年期におけるソーシャル・サポートと主観
 の幸福感との関連―対象表象の視点を加えて― 九州大学心理

- 学研究、四、二六七―二七五。
 森朋子・雨森聡・酒井博之(二〇一〇) 効果的な修学サポートを
 目指すプログラム・デザイン実践―認知的徒弟制における兄弟
 子の立ち位置に注目して― 日本教育工学会第26回全国大会講
 演論文集、六五三―六五四。
 日本学生支援機構(二〇〇九)「大学、短期大学、高等専門学校
 における学生支援の取組状況に関する調査について」調査報告
 日本学生支援機構(二〇〇七) 大学における学生相談体制の充実
 方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」
 の「連携・協働」―
 日本ピア・サポート学会企画(二〇〇八)『ピア・サポート実践
 ガイドブック―Q & Aによるピア・サポートプログラムのす
 べて―』ほんの森出版
 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努(二〇〇七) ピアサポ
 ート・ピアカウンセリングにおける文献展望 山口県立大学社
 会福祉学部紀要、一三、一〇七―一二一。
 佐藤浩章(二〇〇五) 学生支援策としてのピア・エデュケーション
 の可能性 IDE・現代の高等教育、No.四七三、二七―三一。
 嶋信宏(一九九二) 大学生におけるソーシャルサポートの日常生
 活ストレスに対する効果 社会心理学研究、七、四五―五三。
 塩澤聖子(二〇〇八) 大学新入生を調査対象とした大学生用ソー
 シヤルサポート尺度の作成 学校メンタルヘルス、一一、三三―
 四二。
 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子(二〇〇六)
 ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート

- 活動 青年心理学研究、一八、五一―六二。
- 寺本憲昭・伊藤昭・伊藤則男・中村成夫(二〇〇七) 学生活動の
効果検証―オリター活動(上級生による新入生支援組織)をケ
ースに― 大学行政研究、二、一三三―一四六。
- 内野悌司(二〇〇三) 広島大学ピア・サポート・ルームの初年度
の活動に関する考察 学生相談研究、一三、一三三―一四二。
- 浦光博(一九九二) 『支えあう人と人―ソーシャル・サポートの
社会心理学―』サイエンス社
- 和田実(一九九二) 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャル
サポートの影響 教育心理学研究、四〇、三八六―三九三。
- Walker, S. A. & Avis, M. (一九九九) Common reasons why peer
education fails. *Journal of Adolescence*, 11, 1573―1577.
- 山口雅敏・和田実(一九九七) ストレスとソーシャルサポートが
孤独感、疾病徴候、および大学満足度に及ぼす影響―大学新入
生についての縦断研究 東京学芸大学紀要(第1部門)、
四八、二九九―二四八。
- 山田礼子(二〇〇五) 『一年時(導入)教育の日米比較』東信堂
- 山田剛史(二〇〇九) 大学での学習成果 Basee 教育研究開発
センター編『大学生の学習・生活実態調査報告書』研究所報、
五一 (pp. 100―107)
- 安田淳一郎・近田政博(二〇〇九) 教育改善活動に参加する学生
の意識変化―名大物理学教室における学生教育委員会の事例―
名古屋高等教育研究、九、一三三―一三三。